中国わいど

ひと・まち

「福」呼ぶ笑顔の落花生ペア

にっこりと笑顔が描かれた落花生のペアが、赤いひもで結ばれてカプセルの中で寄り添う。その名も「恋のお豆守」。8年前に福山市内で始まった豆まきイベント「福まき」でまかれ、拾った人たちから幸せな知らせが相次いでいる。

同市の佐野和行さん(63)、ひろこさん(63)夫妻は、2017年1月にあった初回のイベントに参加した。会場の福山城天守前広場を飛び交う袋入りの豆に交じって、足元に転がってきた1個のカプセルに和行さんが気付いた。

手に取ると、中には目を閉じてほほ笑む表情の落花生が二つ。まるで良い夢でも見ているような姿に夫妻はほっこりとさせられ、自宅の棚に飾ってみた。すると思いがけない吉報が届いた。その年の秋、次男(34)が結婚し、翌年には孫も誕生した。

イベントでは1万～2万袋の豆がまかれる。カプセル入りの「恋のお豆守」は30個ほどしかないが、夫妻は23年も運良く手にした。写真に収め、財布に入るサイズにして配ると、受け取ったおいやめい、かつての職場の同僚から結婚の報告が舞い込んだ。ひろこさんは「不思議な縁を感じ、御利益に驚いた」と振り返る。

「恋のお豆守」を考案したのは、イベントに特別協賛する豆菓子製造の徳永製菓（同市）。漢字の豆を横にすると「KOI（恋）」と読めることから着想を得たという。同社が三重県で運営する豆菓子専門店の女性店長が、数百個の落花生の中からサイズや形がぴったりのペアを選び、一つ一つ手作りする。

同社の元には、佐野さん夫妻の他にも「子どもが結婚した」「彼氏ができた」といった喜びの声が届く。上迫豊社長(58)は「予想外の反響で、まさに『福まき』を体現している。ずっと続けていきたい」と話す。

コロナ禍の中止を挟んで7回目となるイベントは2月1日。上迫社長は落花生のペアに今年も願いを込める。「皆さんに幸福が訪れ、笑顔で楽しい1年を過ごせますように」

（浜村満大）

「福をたくさんもたらしてくれた」。自宅で保管している「恋のお豆守」を披露するひろこさん（撮影・大川万優）